

高校生へ 私が選んだ 1冊の本

小惑星探査機 はやぶさの大冒険

山根 一眞：著
(マガジンハウス)

「6月13日、小惑星探査機『はやぶさ』が帰還しました。」

何がそんなに凄いのだろう。と、ニュースを見て思ったことを思い出した。その時、私はまだ「はやぶさ」がどんな思いを載せて宇宙を旅していたのか知らなかった。

この本を読んで、「はやぶさ」について沢山のことを学ぶこととなる。まずは、打ち上げに辿り着くまでに、多くの人の協力と長い年月、莫大な費用が必要だということだ。部品の製作では、それぞれの専門業者の協力のもと、試行錯誤を重ねて完成していくのである。絶対に成功させたいという熱い思いが、製作者たちのインタビューから伝わってきて、興奮した。

そして、一番驚いたことは、宇宙での「はやぶさ」の動きが緻密な計算で成り立っていることだ。軌道を進むときの速度が、1秒間に1cmずれることも許されないぐらいに厳しく設定されているのだ。着地時においても、同様のことが言える。私たちの想像の中ではゆっくり動いているように思える小惑星「イトカワ」は、時速10万kmの速さで公転している。「はやぶさ」が着地するためには同じ速度で並んで飛ばなければいけないため、2年もかけて少しずつ加速するのである。「はやぶさ」が小惑星をピタリととらえるのは、東京か

らブラジルのサンパウロの空を飛んでいる体長5mmの虫に弾丸を命中させるようなものと記されていたことは、私の意表を突いた。

あれだけ準備を万端にしていたにも拘わらず、「はやぶさ」は宇宙でいくつものピンチに面した。地球との通信が途絶えてしまったり、イオンエンジンが停止したり…しかし、これらのピンチを切り抜けられたのは、プロジェクトマネージャー川口さんの臨機応変の対応と万が一の事を考えて色々な手段を周到に用意した計画性があったからだ。何が起こるか分からない宇宙での闘いに打ち勝った宇宙研の人々の諦めない精神に感動した。

本書の中では川口さんのユニークな言葉が沢山あるが、中でも印象に残っているのが、「『おもしろかった』ので、みんな一生懸命努力したんです」という言葉である。利益を得たいとか偉業を成し遂げたいとかの思いではなく、純粋な好奇心が人々を動かす力の源になっていることは、とても素敵なことだと思う。私も自分が興味を持って、夢中になれるものを見つけたいと感じた言葉だった。

「はやぶさ」は、沢山の人の努力や期待、不安を背負いながらも、宇宙の「物質」を持ち帰るという自分の役目を果たしてくれた。それだけでなく、多くの人々に大きな感動と勇気、自信を与えてくれた。もう「はやぶさ」は形として残っていないが、きっと私達の心の中で生き続けるだろう。

これからも、「宇宙」には多くの人々にロマンを与える存在であってほしい。

(福井県立藤島高等学校 2年 落分 沙希)